

資料紹介

国民党及び南支石炭資源に関する資料 (2)

佐賀県立図書館資料課 郷土調査担当

石橋 道秀・田中 智美・百武 由樹

はじめに

本稿で紹介する書簡は、平成二二年(二〇一〇)佐賀県立図書館に寄贈された塚原嘉一郎関係資料(以下、「資料」)の一部である。本稿は「国民党及び南支石炭資源に関する資料(1)」^①の続編であり、紙面の都合により掲載できなかった南支の石炭資源開発に関する資料を中心に掲載する。本稿では、まず、塚原嘉一郎の書簡一通、孫文の革命を支えた宮崎滔天^②の書簡四通、三井物産の要職にあった芳川寛治の書簡一通を取り上げる。これら六通の書簡は、編年順に掲載した。次に、徐謙、陳中孚、唐紹儀、殷汝耕、殷柱公、戴傳賢、章士釗など、中国国民党の枢要な人物たちが塚原嘉一郎とその周辺の日本人に宛てた中国人の書簡を翻刻・紹介する。

なお、本稿では前号同様、便宜上次の理由により、「国民党」及び「南支」の用語を使用している。まず、書簡中に述べられている人物の属した組織は、一九一一年の辛亥革命後の国民党、中華革命党、一九一九年に成立した中国国民党であること。次に、中国南部、華南地方のかつての呼称である南支であること。以上のことから本稿ではこれらの用語を使用している。

本稿で掲載する書簡は、孫文の第三革命(一九一五〜一九一六)後に作成されたものであり、国民党の資源戦略の一端を解明できる資料を含んでいる。そこで、本稿ではこれら書簡を翻刻し、今後の研究の一助になることを願って掲載することとした。

まず日本人の書簡を取り上げ、次に中国人の書簡について述べる。

一 塚原嘉一郎書簡の概要

本書簡の作成期日は大正七年(一九一八)七月四日で、何先生と馬場先生に差し出した書簡の写しである。「興寧製鐵公司」用箋使用。

宛先の何先生は、何天炯^③を指すものと思われ、「上海弗洋銀七千四百六拾四弗參拾五仙」を台湾銀行から送ったことを通知したものである。受取人名義を何天炯とせず、「何曉柳先生」としたことを知らせると共に、「各銀行トモ支那ヘノ電送金ニ注目」していること、また、「我々ノ關係世間ニ漏レ」ることを懸念している旨を申し含めている。この書簡から、秘密裡に資金調達を工作していることが伺えて興味深い。

塚原嘉一郎は、この書簡を作成した三ヶ月前の大正七年(一九一八)四月二〇日には「興寧組合規約」を結んでいる^④。この組合の構成員について

は、加盟した人物名を欠くため不明であるが、規約第二項に次のとおり記載されている。

一、本組合ノ持分ハ何天炯何曉暉十分ノ五之ヲ代表ス

この条項に見える何天炯と、右傍に記された何曉暉は同一人物であろう。^⑤ 書簡の「何曉柳」も何天炯の異名だと推定される。

なお、「興寧組規約」と同一の日に「興寧鉄山契約書」が締結されているが、構成員として次の五名の自署と押印が確認出来る。^⑥ 何天炯(印)、芳川寛治(印)、山田純三郎(印ナシ)、塚原嘉一郎(印)、菊池良一(印)。従って、ほぼこれら五名は両組合の構成員とみて差し支えなからう。

また、両規約に先立ち、前年の一九一七年、塚原と孫文らは「日支組規約」^⑦を締結している。この規約書は複数作成されており、その中で和文タイプで作成された「日支組規約」には、「孫文氏一党ト塚原ト協議ノ上」作成した旨の付箋が添付されている。^⑧ 規約に名前のある中国人と日本人は次のとおりである。※は前記両規約と重複する人物。

孫逸仙、張人傑、朱大符、廖仲愷、楊丙、丁仁傑、載傳賢、余健光、蔣介石、周日宣、犬塚信太郎、秋山眞之、※塚原嘉一郎、※菊池良一、※芳川寛治。

このように「日支組規約」「興寧鉄山契約書」に見える日本人はほぼ重なっている。

「馬場先生」については不明であるものの、技師の馬場惟明か。「何天炯書簡」(函塚原〇三三六)に「馬場」「何」の左横に並記されており、文面から何天炯は上海で活動していたと考えられるため、上海在住の日本人だと推定される。^⑨

なお、塚原嘉一郎については本紀要第六号(八六頁〜八七頁)に掲載し

ておいたので参照されたい。

二 宮崎滔天書簡の概要

宮崎滔天はアジア主義人物の一人として広く知られ、自伝并に先行研究についてもなされている。本稿は宮崎滔天書簡の紹介を主眼としたものであるため、滔天の概要を記述するに留める。

宮崎滔天(一八七七〜一九二五)は熊本生まれ。本名寅藏。二一歳の時、兄・弥藏の説く中国革命主義に共鳴し、以後、これが生涯の大方針となる。朝鮮改革主義者の金玉均亡命中にはその協力者となり、中国革命の布石としてタイや中国に渡ること数度。一八九七年(明治三〇年)に孫文と初会見し、以後、日本における孫文の主要な協力者となり中国革命を援助した。中国同盟会参加。難航する革命運動に無力感を抱え、一時期「桃中軒牛右衛門」を名乗り、浪花節語りを生業としたこともある。辛亥革命成就後も孫文・黄興ら革命家との協力関係は続き、その死に際しては孫文らより賛辞を受けた。著作も多く残し、主著に『三十三年之夢』などがある。

宮崎滔天と塚原嘉一郎の関係について、年譜^⑩の大正九年一月八日に「菊池良一・山田某・塚原某と中央亭で会食」、また同年五月二八日に「山田某経営のマッチ会社見学、萱野長知と塚原某と同道」という記述が見られる。滔天が塚原嘉一郎といつ頃知遇を得たかは不明だが、後述の書簡四通の時期(大正八・九年)と、この年譜の「塚原某」との付き合いの時期が重なると、この「塚原某」とは塚原嘉一郎のことかと推察される。

宮崎滔天書簡は四通含まれており、作成時期は大正八年(一九一九)〜九年である。

2-1 宮崎滔天書簡〔大正八年（一九一九）一月二七日〕

仙台滞在時に塚原に宛てた書簡。年号を欠くものの、大正八年（一九一九）の一〇月二四日は「宇都宮、鹿沼を経て仙臺に滞在」とあることから、この年に作成されたものと推定した。¹¹⁾

2-2 宮崎滔天書簡〔大正八年（一九一九）一月一八日〕

宮崎滔天から子純（山田純三郎）と子龍（菊池良一）に宛てた書簡。この書簡が塚原嘉一郎の家に伝来したのは、塚原嘉一郎が、孫文の革命に必要な資金提供者の一人であったためであろう。つまり、本書簡で滔天は子純と子龍とに資金の援助を依頼している。しかし、子純と子龍の財力だけでは不足したため、子純、子龍いずれが塚原に渡したものは不明であるものの塚原を頼ったものと思われる。

2-3 宮崎滔天書簡〔大正九年（一九二〇）四月一日〕

一二日に陶々亭萱野氏宅にて協議のための出席を依頼した書簡。滔天は大正九年（一九二〇）四月一〇日に萱野長知を往訪していることから、この年に作成したものと推定した。¹⁴⁾

2-4 宮崎滔天書簡〔大正九年（一九二〇）四月一三日〕

昨一二日に陶々亭で山田君と会見した結果を塚原に報告した書簡。前掲書簡の翌々日に作成されたもので塚原はこの会合に出席しなかったと思われる。萱野君の勧告を受け入れ無条件放棄に賛成したことを報告しているが、無条件放棄の詳細は不明。

三 芳川寛治及び書簡の概要

芳川寛治（一八八二～一九五六）について記された資料は少なく、本項

では『人事興信録』及び新聞記事で確認できた内容を記す。

まず、『人事興信録』には芳川寛治の主な略歴が掲載される。芳川寛治は元韓国統監子爵曾根荒助の二男。明治三八年（一九〇五）東京高等商船学校を卒業し実業界に入っている。大正九年芳川家の家督を相続し、襲爵を仰せ付けられている。

第三版から第七版までは未見であるが、第八版（一九二八）によると、芳川寛治の勲等、役職等は次のとおり記載されている。

従四位、伯爵、常磐砒業（株）社長、台湾炭鉱、足利紡績各（株）取締役。東京府華族

このように実業界で活躍しているが、第一八版（一九五五）では実業界から「引退」している。¹⁵⁾

なお、大正六年（一九一七）三月、妻の鎌子（父は芳川顕正）と芳川家運転手であった倉持陸助との心中未遂事件が契機となり、義父芳川顕正は枢密院副議長の要職にあったが辞職している。¹⁶⁾ 本稿で取り上げた書簡は、この事件からほぼ二年から三年後書簡がほとんどである。これらの書簡の内容から、政界進出の途が絶たれ芳川寛治が、三井物産のもとで南支石炭開発に関わることになり、日支組合員としての活動を知りうるものである。

本書簡は、昭和七年（一九三二）九月、芳川寛治から塚原嘉一郎に宛てられたものと考えられ、『秋山真之』に掲載された内容に近似している。¹⁷⁾

『秋山真之』では秋山真之が「海軍ニ於ケル鬼才タルノミナラズ憂国ノ大政治家」であったと氏の功績について論じている。秋山真之の存命中、芳川は三井物産の時局掛参謀であり、孫文を援助する立場を主張していたことが裏付けられる。なお、秋山真之については本紀要第六号（八九頁から九

二頁)に取り上げたので参照されたい。
次に中国人書簡について述べる。書簡は作成年代順とし、差出人別に配列した。

四 徐謙書簡の概要

徐謙(一八七一〜一九四〇)は安徽省出身の政治家。清朝時代から司法関係職を歴任し、一九一七年広東政府で孫文の秘書長を務めた人物である。¹⁸⁾

内容は、手紙を差し出した日の前日、照霞楼での面会がかなわなかったこと、及び、当日午後開催する酒宴への招待である。書簡中、石炭関係については言及がない。軍政府司法部用箋使用。

五 陳中孚書簡の概要

陳中孚(一八八二〜一九五八)は中華民国の政治家。字は奇曾。¹⁹⁾

書簡は、芳川寛治と塚原嘉一郎に宛てられたもので、大正八年(一九一九)九月四日の日付がある。右肩に「写」と書かれている。

排日熱の関係上、石灰岩採取地の地方民から反対の願書が提出されるといった情勢を伝えている。また、「御両所の承諾なくして第三者に石灰岩を供給せざる事ハ堅く拙者の承諾致し居候事」と述べている。石灰岩はセメントの材料か、銑鉄を作る際に用いたものであろう。銀座伊東屋製の用箋使用。

なお、本書簡と同文の書簡が一本確認されたが、紙面の都合で割愛した。²⁰⁾

六 唐紹儀書簡の概要

唐紹儀(一八六〇〜一九三八)は、清末・民国初期の外交官、政治家。字は少川。廣東省の人。辛亥革命で、北方代表として革命派と講和。民国最初の國務総理に就任。²¹⁾

6-1 唐紹儀書簡(大正七年(一九一八)一〇月二日)

本書簡は、唐紹儀が李茂之に差し出したものであるが、塚原嘉一郎に手渡されたものである。内容は、家族の近況や李茂之に河南の土地売却金の送金を依頼したものである。書簡中、原内閣が方針を変更した声明を出した点について述べていることから、大正七年(一九一八)と推定した。²²⁾ 塚原嘉一郎が広東へ行って会社事業を興そうとしていることから、塚原を李茂之に紹介するためのものであろう。しかし、なぜ李茂之に宛てられた書簡が塚原嘉一郎の家に残っていたのか検討の余地がある。

6-2 唐紹儀書簡 民国七年(一九一八)二月二四日

在上海の唐紹儀が塚原嘉一郎に宛てた書簡。滞日中御世話になったことに対する礼を述べると共に、元旦の多幸を祈念すること等を述べたものである。²³⁾

七 殷汝耕書簡の概要

殷汝耕(一八八八〜一九四七)は浙江省出身の親日政治家。早稲田大学政経学部卒業。日本人を妻とする。国民政府下で対日問題にあたり、一九三五年冀東防共自治政府を組織した。戦後漢奸として処刑された。²⁴⁾

殷汝耕が塚原嘉一郎に宛てた書簡は二通確認されたが、年代の特定が困難であったため、便宜上月日の古いものから配列した。

7-1 殷汝耕書簡（年不明）二月八日

まず、無事上海に到着したことや近況を述べているが、家屋がないため旅館に滞留中であることを断っている。岑氏は、芳川氏が至急使者を派遣すること、その後、上海経由で岑氏の紹介状を持って北京と交渉することを希望している。罫紙は上海九華堂厚記堂製と思われる。

書簡に「岑氏の紹介状を持って北京へ交渉するを希望」とあるが、「岑氏」は岑春煊のことを指すと思われる。このことから、岑春煊が「北京」の要職と密接な関わりがある在職期間に作成された書簡であると推定される。本稿の対象とした書簡は、大正七年（一九一八）から同九年（一九二〇）のものがほとんどであるため、この書簡もこの三年の間に作成されたと思われる。一九一六年袁世凱の死後、岑春煊は孫文らの南方政府側にくもの、その後両者は対立する²⁵⁾。

7-2 殷汝耕書簡（年不明）四月五日

発給年は不明である。本書簡の前半では、海南島開発の近況を述べた後、資本金の拠出を依頼している。後半は安徽省蕪湖に石炭鉱技師を派遣するよう求めている。蕪湖の開発については「何天烟書簡」²⁶⁾でも塚原嘉一郎に報告と依頼がなされ、「囑馬場君即日調査」と技師の派遣を要請している²⁷⁾。上海九華堂厚記堂製罫紙使用。

両書簡の作成時期により書簡の解釈は異なってくるが、今後の研究を待ちたい。

八 殷柱公書簡の概要

殷柱公（一八八三～一九四〇）は前掲の殷汝耕の兄で、字は鑄夫、号は柱公である。光緒三四年（一九〇八年）、渡日。早稲田大学政治経済科を卒業。中国同盟会に加入し、一九二一年帰国。民国成立後、国会議員衆議院議員に当選した人物である²⁸⁾。

書簡の日付は年号を欠き、九月一二日付けとなっている。この書簡で残党の殲滅はもうすぐであることを報告しているが、孫文側に立った戦況の様子を塚原嘉一郎に伝えたものである。なお、本書簡は罫線らしき縦線が認められた。収書時、本書簡（図塚原〇五三八）は「殷汝耕書簡」（図塚原〇五三六、〇五三七）と重ねて保存されていたため、この線は前出の殷汝耕書簡の罫線の色が染み、付着したものと思われる。

九 戴傳賢書簡の概要

戴傳賢（一八九〇～一九四九）は四川省広漢県出身（本籍は浙江省呉興）の政治家、理論家。字は選堂、季陶。筆名は天仇。蒋介石ら国民党右派の理論的指導者²⁹⁾。

書簡の内容は、塚原嘉一郎を「吾輩極拝同志」（尊敬する同志）であると陳競存（陳炯明）に紹介したものである。塚原嘉一郎が上海を訪れた折り、孫文が懸命に彼に支援を依頼したことを報告している。なお、陳炯明に宛てられた書簡が、なぜ塚原嘉一郎の家に残っていたのか検討の余地がある。罫紙使用。

国民党及び南支石炭資源に関する資料(1)に引き続き掲載したものである。これらの書簡からは、塚原嘉一郎及び三井物産が南支の石炭開発に着眼し鉦区を拡大していこうとする内実の一部を垣間見ることができ。また、これら利権に絡む日支組合員と国民党との結びつきを知りうる恰好の資料であると言えよう。

一方、宮崎滔天の書簡は、アジア主義の立場から孫文の革命を支援する姿勢が読み取れるが、当然ながら石炭開発に伴う利権獲得の欲はさほど感じられない。この点、塚原嘉一郎と宮崎滔天では孫文の革命についての基本的な軸足が異なっていたように斟酌される。

本稿で紹介した書簡が今後の研究の踏み台となることを念じると共に、「日支組合規約」、「興寧組合規約」等について専門的な研究が展開されることを期待したい。

また、中国人書簡は、キーパーソンである塚原嘉一郎と、中国の一連の革命に関わった枢要な人物との関わりが読み取れて興味深いものがある。これら書簡を通して、革命石炭資源開発の研究にとどまらず、辛亥革命後の国民党及び軍閥との関係を知りうる上で、新しい知見が得られることを祈念して已まない。

本稿で紹介した書簡の一部は編年し提示するに至らなかったが、今後の研究によって解明されることを切望する。また、試案として提示した人物相関図、解説及び翻訳等について諸賢からご批評頂くことを切に願う。

なお、本稿は多くの方の助言を得て、脱稿に至った。皆様のお力添えに感謝すると共に、前号に引き続き掲載の場を与えて頂いた佐賀大学地域学歴史文化研究センターの皆様にお礼を申し添えたい。末筆ながら、これら貴重な資料を御寄贈頂いた塚原家の皆様にも感謝の言葉を申し上げます。

参考文献(五十音順)

秋山真之会編『秋山真之』、東京、秋山真之会、一九三三。

鏡屋一著『章士釗と近代中国政治史研究』、東京、芙蓉書房出版、二〇〇二。

石橋道秀他共著『国民党及び南支石炭資源に関する資料』、『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』第六号、佐賀、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇二二、一〇九〜一一八。

——『秋山家書簡の紹介』、『佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要』第六号、佐賀、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇二二、八五〜一〇八。

佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇二二、八五〜一〇八。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』、東京、吉川弘文館、一九八九。

佐賀新聞社『佐賀新聞』、佐賀、一九一七。

三省堂編修所編『コンサイス外国人名事典』、東京、三省堂、一九九四。

下中直人編『世界大百科事典』、東京、平凡社、二〇〇七。

徐友春主編『民人物大辞典』、石塚莊市、河北人民出版社、一九九二、二〇〇七(増訂本)。

田中宏己著『秋山真之』、東京、吉川弘文館、二〇〇四。

中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』、東京、中央大学出版部、一九九九。

一九九九。

中国・地図出版社『中華人民共和國地図集』第一版、東京、帝国書院、一九七九。

丁秋潔・宋平編・鈴木博訳『蔣介石書簡集』、東京、みすず書房、二〇〇一。

中村義^か編『近代日中関係史人名辞典』第一版、東京、東京堂出版、二〇一〇。

日外アソシエーツ株式会社編『中国人名事典 古代から現代まで』第一版、東京、株式会社伊國屋書店、一九九三。

宮崎滔天著『宮崎滔天全集』東京、平凡社、一九七三。

宮崎滔天、北一輝、萱野長知著『アジア主義者たちの声 中』、東京、書肆心水、二〇〇八。

『人事興信録』、東京、丸善株式会社。

〇八。

『人事興信録』、東京、丸善株式会社。

(1) 本紀要第六号(二〇九〜一一八)。

(2) 宮崎滔天(二八七〇〜一九三三)は明治・大正時代の中国革命運動家。明治三〇

年(一八九七)秋、孫文と知り合い、以後孫文の革命運動の絶対的支援者として活動した。『国史大辞典』(一九八九)「宮崎滔天」の項から抜粋。

(3) 何天燭(一八七七〜一九二五)は中国広東・興寧出身の革命家で、広東同盟会会

長も務めた。辛亥革命が起きると、孫文の駐日代表となり活躍した。―日外アソシエーツ（一九九三・九三）。

- (4) 「興寧組合規約」(図塚原〇四五九)の目的は次のとおり記載されている。「本組合ハ興寧鉄煤公司ト称シ廣東省興寧縣興寧所在鉄鋼及其他鉱物ノ採掘生産販売及之ニ伴フ運輸ヲ営ムヲ以テ目的トス」。構成は六名とあるが、署名を欠く。また、第二条項に「六名ヲ以テ組織シ何天燭(右傍に何曉暉)之ヲ代表ス」とあるが、署名を欠く。

- (5) 本規約はタイプで刻されたものであるが、「何曉暉」の部分は墨書されている。

- (6) 「興寧鉄山契約書」(図塚原〇三四七。大正七年(一九一八)四月二〇日付け)の目的は次のとおり記載されている。「本公司ハ興寧鉄煤公司ト称シ興寧鉄煤公司ヨリ鉄鋼ヲ買受ケ之ヲ精錬販売スルヲ以テ目的トス」。第二条項に「六名ヲ以テ組織シ何天燭之ヲ代表ス」とあるが、署名は五人分しか確認できず、一名は不明である。

- (7) 民国六年(一九一七)六月一日、大正六年(上同)六月一日締結。直筆(図塚原〇三五〇)。この規約の冒頭に「支那富源開発ヲ目的トシ日支両国人ヲ以テ組合ヲ組織ス而シテ規約ヲ定ムルコト左ノ如シ」と示されている。

- (8) 民国六年(一九一七)六月一日、大正六年(上同)六月一日締結。タイプ版(図塚原〇四六〇)。

- (9) 本紀要第六号(二〇一一・一一二)に「嘯馬場君即日前来調査」参照。

- (10) 宮崎滔天(一九七三・五卷 七二七―七二八)。

- (11) 宮崎滔天(一九七三・五卷 七二六上)。

- (12) 萱野長知の邸宅―宮崎滔天(一九七三・五卷 七二七下)。

- (13) 萱野長知。滔天は海南嶋問題について萱野長知と商談している。―宮崎滔天(一九七三・五卷 四二四下「金子克己宛」大正八年四月三日付け)。

- (14) 宮崎滔天(一九七三・五卷 七二七下)。

- (15) 『人事興信録』一九版(昭和三年)以降にて掲載されていない。

- (16) 「佐賀新聞」の大正六年(一九一七)三月九日から二六日にかけて、妻の鎌子(父は芳川顕正)と芳川家運転手であった倉持陸助との心中未遂事件が報道されている。

- (17) 『秋山真之』(一九三二・二五六)には、文体及び表記が異なるもののほぼ同文の内容の文章が掲載されている。以下参考まで芳川寛治の追憶談を引用しておく。引用に当たっては、固有名詞以外の旧漢字は常用漢字に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めている。

なお、芳川寛治談の直後に山田純三郎談が掲載されているので、併せて参考にさせていただきます。

又將軍と親交のあった芳川寛治伯は次のように述べている。

私は秋山眞之將軍と犬塚信太郎君と三人極めて仲の好い間柄で、縷々烏鷲を戦わしたり会飲したりした。偶々歐洲大戦勃発に際しては秋山將軍は海軍軍務局長で、私は三井物産の時局掛參謀をしていたから、三人は毎日のように集まって時局の成行を談じあっていた。時としてこれに田中義一、福田雅太郎の兩將軍が加わることもあった。

一日秋山、犬塚兩君と三人で三十間堀の新田中に会した時將軍は私に向い「誰か金を出してくれる者はないか」と言うので、その理由を尋ねた処「今の内に支那と固い握手をして置かなければ大戦後に困る事になる。換言すれば我国に反対する袁世凱を倒し、我国に好意を持つ南方を援助し、攻守同盟と經濟同盟を結ぶのだ」という事であった。これは私の親譲りの外交方針だったので私は直ちに賛成した。此問題は大正五年三月八日我政府の閣議にも上った。私は秋山君の口継で田中、福田兩將軍から「國家の爲是非に」と頼まれ、唐繼堯や岑春煊の南方軍務院を援助し、同時に犬塚君、久原房之助君も孫逸仙其他の南方を援助したのであった。

袁世凱は死んだが英國の抗議から日本の外交は漸次軟弱追従外交と化し内政不干渉を声明するに至り、遂に今日に於ては滿洲事變、上海事變の勃発となった。秋山將軍は予め此事あるを憂えて種々画策したものであったが、此の意味に於て秋山將軍が當時に投げた一石は実に貴重なものであった。今是を思い感概に堪えないのは、秋山將軍が単に海軍の俊髦であったのみならず実に憂國の大政治家であったと思う事である。

- (18) 日外アソシエーツ(一九九三・二八〇)。

- (19) 徐友春(二〇〇七)「陳中孚」の項から抜粋。

- (20) 図塚原〇五一。文吉謹製の用箋使用。

- (21) 日外アソシエーツ(一九九三・二九三)「唐紹儀」の項。

- (22) 李茂之(一八八―?)は広東省新会区出身。辛亥武昌起義後、広東都督署參議に任じられ、南京臨時大總統府秘書となる。一九一三年、參議院議員に当選。一九一四年、上海で金星生命保險会社を設立。ならびに谷鍾秀と雑誌「正誼」を創刊。一九一六年、第一次回復国会時、參議院議員に任じられる。一九一八年、兩

広塩運使に任じられる。一九二〇年、広東財政特派員に任じられる。一九二二年、第二次回復国会時、再び参議院議員に任じられる。その後、広東省銀行監事長に任じられる。―徐友春（一九九二）「李茂之」の項。

(23) 第一次世界大戦中に、寺内内閣が中国の段祺瑞内閣との間で八口一億四千五百万円の借款を行った。しかし、大正七年（一九一八）、寺内内閣は九月中旬に、段内閣も一〇月に瓦解する。次の原内閣は対中不干涉政策をとり、この借款は放棄される。―『国史大辞典』（一九八九）「西原借款」から抜粋。

(24) 国史大辞典編集委員会編（一九七九・八八六）。

(25) 以下、先行研究によって知りうる大正七年（一九一八）から同九年（一九二〇）の間に絞り、国民党の主な動向を摘記する。

一九一八年一月二〇日、義和総代表に岑春煊、外交総代に伍廷芳（筆者注：一九一七年孫文らと広東軍政府を組織し外交部長となった人物）、財政総代表に唐紹儀（中略筆者）を選出（一九九九・三七八頁）。

しかし、国会の議決によって組織されたものではないという点で、この聯合会議は法的正当性を欠いていた（中略筆者）。そして五月四日、孫文は（筆者注：聯合会議の）海陸軍大元帥を辞任した（同：三七九頁）。

その後、改組軍政組織として七名の総裁が選出された。―中央大学出版社（同：三八〇頁）。

一九一九年二月二〇日から二か月余りにわたって上海で、両者（筆者注：北京政府と南方政府）の平和統一を協議する南北義和に臨むことになったのである（中略筆者）。南北義和が決裂し（中略筆者）一九一九年八月七日に孫文が総裁を辞任。―（同：三八三頁）。

一九二〇年三月二四日に唐紹儀が、（筆者注：主席総裁の）岑春煊と北京政府との秘密交渉を暴露すると、国会が主席総裁不信任案を可決したために、広西派と国会との関係が悪化した。―（同：三八三頁）。

三月末から四月初にかけて、岑春煊と広西派の独断専行に不満を抱いていた伍廷芳（筆者注：一九一七年孫文らと広東軍政府を組織し外交部長となった人物）らと伍朝枢・李烈鈞らと、約二〇〇人の国会議員が廣州から香港を経て孫文・唐紹儀の滞在する上海へ向かい、更に唐繼堯が軍政府政務会議の効力を否認する通電を発し、林保樸も総裁を辞任。―（同：三八三頁）。

(26) 「何天炯書簡」（年不明）七月二十七日。塚塚原〇三二九。

(27) 本資料群に「馬場惟明氏へ渡金計算」（塚塚原〇四六九）が確認される。二枚のうち一枚は「芳川事務所」の罫紙使用。ここでの「技師」は馬場氏の可能性が高い。

この計算書は作成年を欠くものの、大正六年、七年における塚原嘉一郎のメモである。計算書は日付、調査地、金額が記されるが、安徽省や蕪湖の調査地は確認できない。安徽省や蕪湖の地名が確認できないのは、馬場氏が両年に調査に出向いていないことを意味する。塚原は馬場氏への派遣を企図したものの、当地では排日の風潮が強く実現できなかった可能性も考えられる。

(28) 徐友春（二〇〇七・一二四八）「殷汝驪」の項参考。

(29) 日外アソシエーツ（一九九三・三七四）。

(30) 鐘屋（二〇〇二・一六）から抜粋。

凡例

資料には差出人名を冠して資料名とした。但し、差出人の直筆か否かの判断は困難である。

書簡は、作成年月日が明らかなもの、月日のみのものからまず編年順に配列し、年不明のものはその後掲げた。なお年号については原文のままとした。便宜上日本語で書かれたものについては日本の年号を使用し、中国語で書かれたものについては民国の年号を使用した。

一、漢字の字体はおおむね常用漢字に改めた。

一、固有名詞は原文の字体を尊重した。

一、変体仮名は平仮名に改めた。

一、字画の不明瞭な文字は□で表した。字数を確定し得ない場合は、□と示した。

一、見せ消ちや抹消した文字等が判読できるときは、遂二、抹消した文字が判読できないときは■のように左傍にを付した。

一、傍注は次のように表した。(例) (カ) 誤字や疑いがあるとき。

一、問題のある文字については「」を付した。

一、中国語による書簡については、影印、解読文と共に翻訳文を掲げた。

一 塚原嘉一郎書簡写扣 (大正七年(一九一八)七月四日 塚原〇四七四)

写扣
大正七年七月四日
東京市麹町區永樂町壹丁目壹番地
興寧製鐵公司

何先生宛送金ノ件
先般大阪ニ於テ御約束申上ケ置候通り御省滬ノ上ハ
直チニ御入手出来得ル様致シ度小生帰京后直様其ノ
手筈ヲ為シ過ル二日台湾銀行ヨリ
上海弗洋銀七千四百六拾四弗三拾五仙
電送致シ候此ノ儀小生ヨリ左ノ通り山田純三郎氏方
宛出電尚ホ同時ニ当地台湾銀行ヨリ上海台湾銀行
何曉柳先生

2
大正 年 月 日
東京市麹町區永樂町壹丁目壹番地
興寧製鐵公司

(電文)
モ打電為致置候事最モ早ク又ノ内子ト存候
七四六ドル三五セントデソシタイワンギンコウ
ヨリトラレタシ
送金額及為替ノ事
洋銀七千四百六拾四弗三拾五仙也ノ明細ハ

芳川、山田、菊池
何氏ニ約束セシ金額
\$ 4,000.00
東京ニテ渡シ済
\$ 10,000.00
何氏ニ約束セシ金額
塚原承知
即チ \$ 4,000.00
\$ 2,535.65 = 芳川氏、馬場氏承知、洋銀 \$ 2,535.65 トナル
為替 157 $\frac{3}{4}$
\$ 7,464.35 = 即チ七月二日台湾銀行ヨリ電送シタル分

一 【翻刻文】

写控 大正七年七月四日

拜啓

御両所無事御省滬ノ御報ニ接シ祝着罷在候

何先生宛送金ノ件

先般大阪ニ於テ御約束申上ケ置候通り御省滬ノ上ハ
直チニ御入手出来得ル様致シ度小生帰京后直様其ノ
手筈ヲ為シ過ル二日台湾銀行ヨリ

上海弗洋銀七千四百六拾四弗三拾五仙

電送致シ候此ノ儀小生ヨリ左ノ通り山田純三郎氏方

何曉柳先生

宛出電尚ホ同時ニ当地台湾銀行ヨリ上海台湾銀行

へモ打電為致置候間最早御入手ノ御事ト存候

(電文)

七四六ドル三五セントデソシタイワンギンコウ

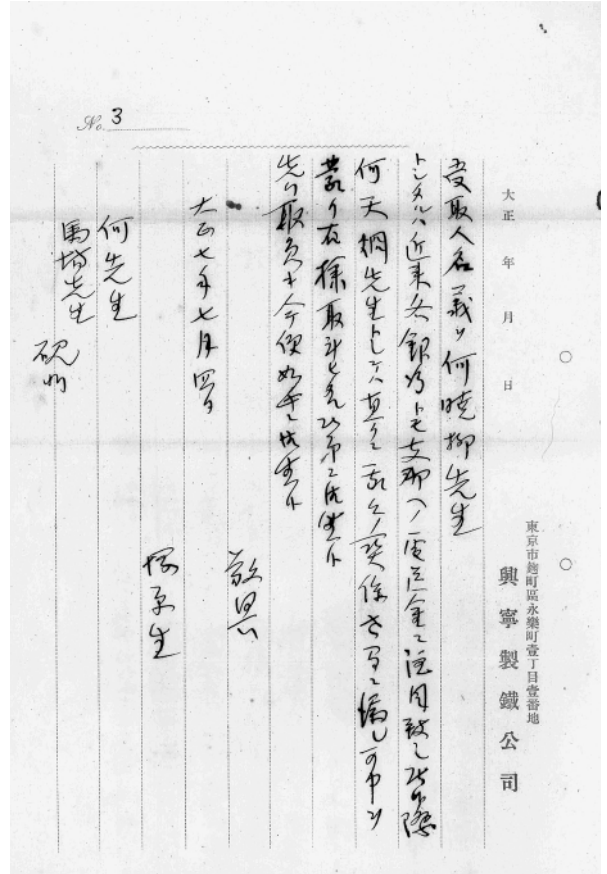
ヨリトラレタシ

送金額及為替ノ事

洋銀七千四百六拾四弗三拾五仙也ノ明細ハ

二 御坐候

芳川、山田、菊池
塚原承知
即チ \$ 4,000.00
\$ 10,000.00 = 何氏ニ約束セシ金額
\$ 2,535.65 = 芳川氏、馬場氏承知、洋銀 \$ 2,535.65 トナル
為替 157 $\frac{3}{4}$
\$ 7,464.35 = 即チ七月二日台湾銀行ヨリ電送シタル分



受取人名義ヲ何曉柳先生

トシタル近來各銀行トモ支那ヘノ電送金ニ注目致シ居候際

何天炯先生トシテハ直クニ我々ノ關係世間ニ漏レ可申ヲ

蒙リ左様取計ヒタル次第ニ御坐候

先ハ取急キ今便如キニ御坐候

敬具

大正七年七月四日

塚原生

何先生

馬場先生

硯北

2-1 宮崎滔天書簡（大正八年（一九一九）一〇月二七日 塚原〇六二八

2-1【翻刻文】

謹啓其後藤村^①

芳川^②両君御談合

の結果如何御

一報願上候御手紙

は弟自宅宛に御届け

被下候へば弟の所に

転送可仕候

何兄^③よりの二通の手

紙今日落手仕候

間入貴覧候書中

石炭の事八十万

問題^④解決候後にせ

よとの文意は過日

もお話申上候通り余

り問題のみ提出する

よふで芳川氏の誤解

を虞れたる也左様御

承知願上候

石炭の結果も至急

御一報願上候

弟の身今や浮萍

の如し何卒万事

宣布奉願上候

敬具

十月廿七日

仙臺にて 弟滔天

塚原先生

坐す

御都合にて今度の
御手紙ハ
盛岡市劇場
藤澤座^⑤気付
宮崎滔天
にて願上候
当仙臺ハ明廿八日迄
にて廿九日盛岡ニ乗
込み三十日 三十一日の
両日ハ同処に留まり
居候
実は仙臺にて御手
紙に接し得る事と
期待し居たる次第
に候 再拝

御都合にて今度の
御手紙ハ
盛岡市劇場
藤澤座^⑤気付
宮崎滔天
にて願上候
当仙臺ハ明廿八日迄
にて廿九日盛岡ニ乗
込み三十日 三十一日の
両日ハ同処に留まり
居候
実は仙臺にて御手
紙に接し得る事と
期待し居たる次第
に候 再拝

謹啓 過日は誠に
御厄介ニ相成りまし
た其後宇都宮より
鹿沼、仙臺、盛岡、
函館、札幌と巡業い
たし弘前は危い処
でのがれまして札幌から
一直線ニ逃げ帰りまし
た敗戦と寒氣の為
めに

2-2 【翻刻文】
謹啓 過日は誠に
御厄介ニ相成りまし
た其後宇都宮より
鹿沼、仙臺、盛岡、
函館、札幌と巡業い
たし弘前は危い処
でのがれまして札幌から
一直線ニ逃げ帰りまし
た敗戦と寒氣の為
めに

2-2 【宮崎】滔天書簡（大正八年（一九一九）二月一八日 函塚原〇〇八

東京には去る十四日
 夕刻帰着し早た
 速御申上候積り
 たが札幌より上野迄三
 十六時間乗りづめの為
 め腎君ての崇りを受
 けて今静養中で失
 礼して居ります廿一日より
 又々北越方面に転戦
 の積りですから
 然るに其後何君問題
 は如何でしょうか今や
 何君は在郷の老父君

東京には去る十四日
 夕刻帰着しました故早
 速御申上候積りでし
 たが札幌より上野迄三
 十六時間乗りづめの為
 め腎君の崇りを受
 けて今静養中で失
 礼して居ります廿一日より
 又々北越方面に転戦
 の積りですから
 然るに其後何君問題
 は如何でしょうか今や
 何君は在郷の老父君

危篤の報に接しな
 からも弟君文け返して
 此方からの吉報を待
 つてるそうです此際十
 万問題は別として差
 当り両兄の御尽力で
 一万丈けでも持たして至
 急帰省させる様な
 工夫はつきますまいか
 僕は目下此点に於て
 御承知通りの無力で
 す外ならぬ事故高利

危篤の報に接しな
 からも弟君文け返して
 此方からの吉報を待
 つてるそうです此際十
 万問題は別として差
 当り両兄の御尽力で
 一万丈けでも持たして至
 急帰省させる様な
 工夫はつきますまいか
 僕は目下此点に於て
 御承知通りの無力で
 す外ならぬ事故高利

貸でも貸して呉ればと
思ひますれど其方も塞
り居りて何分にも力に
任せません何とか一時の
善巧方便はあります
まいか
此の爲めにも実は参上
して御相談申上りたい
のですが先陳の通りで静
養してゐますので不取敢
以手紙御相談申上る次
第です身体の都合で

明日にでも伺ひ度いで
すが何時頃が宜しきやら
御示を願ひます
席ながら御尋ね申上度
きは孫文学説の翻
訳問題です若し藤
村先生がやつて下され
ば是にました事はあり
ませんが如何でしょう
今年是最早出版物も
印刷屋が駄目と思ひ

貸でも貸して呉ればと
思ひますれど其方も塞
り居りて何分にも力に
任せません何とか一時の
善巧方便はあります
まいか
此の爲めにも実は参上
して御相談申上りたい
のですが先陳の通りで静
養してゐますので不取敢
以手紙御相談申上る次
第です身体の都合で

明日にでも伺ひ度いで
すが何時頃が宜しきやら
御示を願ひます
席ながら御尋ね申上度
きは孫文学説の翻
訳問題です若し藤
村先生がやつて下され
ば是にました事はあり
ませんが如何でしょう
今年是最早出版物も
印刷屋が駄目と思ひ

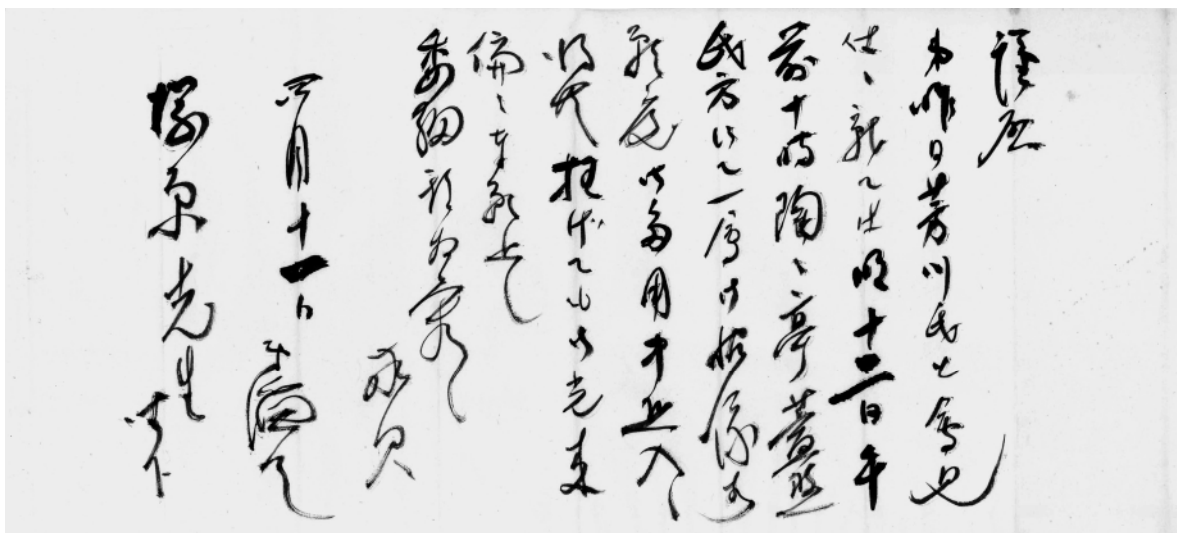
ますますが明春は早く出し
 たいものだと思ひます
 藤村先生の御心中御聞
 かせ下さい
 札幌から帰れば温暖春
 の如しです菊池巖君
 も山田萱堂も定めて
 御健勝で入られます事
 と喜んで居ります
 乍末筆ご一同様ニ
 よろしく 敬具
 十一月十八日
 弟滔天

ますますが明春は早く出し
 たいものだと思ひます
 藤村先生の御心中御聞
 かせ下さい
 札幌から帰れば温暖春
 の如しです菊池巖君
 も山田萱堂も定めて
 御健勝で入られます事
 と喜んで居ります
 乍末筆ご一同様ニ
 よろしく 敬具
 十一月十八日
 弟滔天

子純
 子龍
 両位先生
 坐下
 今日は何はう明日は何
 はうと一日延びに延び
 遂に手紙も遅れま
 した 失礼々々
 子純
 子龍

子純^⑮
 両位先生
 子龍^⑯
 坐下
 今日は何はう明日は何
 はうと一日延びに延び
 遂に手紙も遅れま
 した 失礼々々

2-3〔宮崎〕滔天書簡〔大正九年（一九二〇）〕四月一日 塚原〇六二一



2-3【翻刻文】

謹啓

弟昨日芳川氏と会見

仕候就ては明十二日午

前十時陶々亭萱埜

氏方にて一会御協議相

願度御多用中恐入候

得共枉げても御光来

偏ニ奉願上候

委細期〔拜見〕居候

敬具

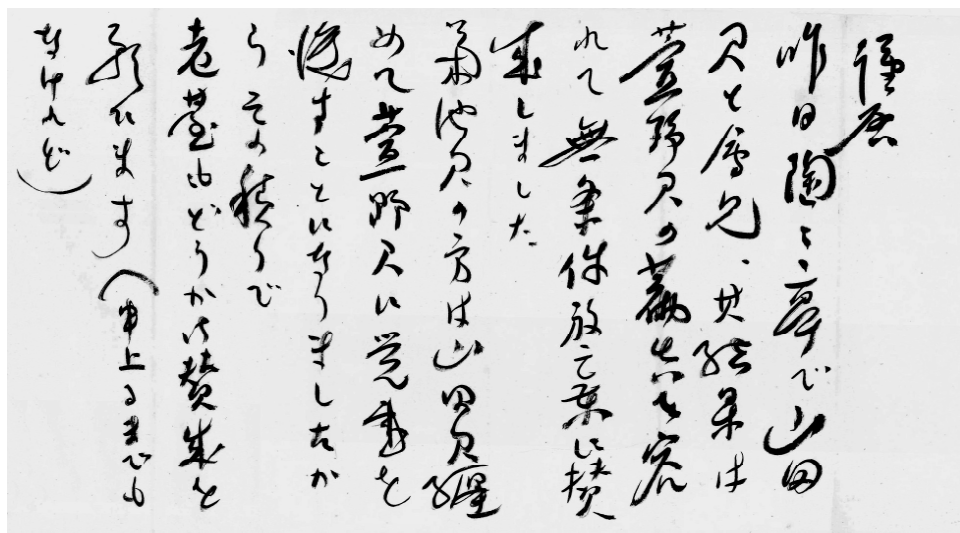
四月十一日

弟滔天

塚原先生

坐下

2-4〔宮崎〕滔天書簡〔大正九年（一九二〇）〕四月一日 塚原〇六二一



2-4【翻刻文】

謹啓

昨日陶々亭で山田

君と会見。其結果は

萱野君の勧告を容

れて無条件放棄に賛

成しました

菊池君の方は山田君纏

めて萱野君に覚書を

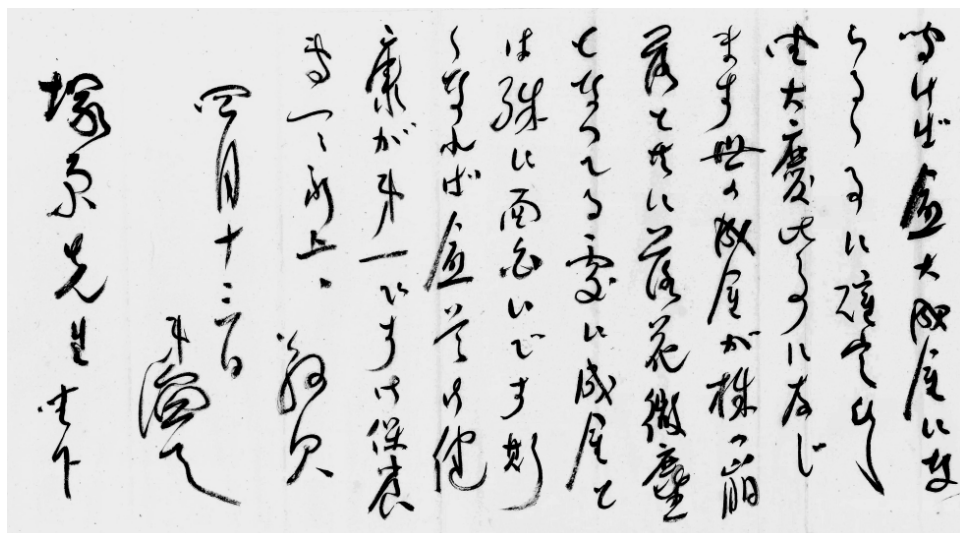
渡すことになりましたか

らその積りで

老台もどうか御賛成を

願ひます（申上るまでも

なけれど）



聞けば愈大成金にな
らるゝ事に確定仕候
由大慶此事に存じ
ます世の成金が株の崩
落と共に落花微塵
となつてゐる処に成金と
は殊に面白いです斯
くなれば愈益御健
康が第一です御保養
專一ニ願上候

敬具

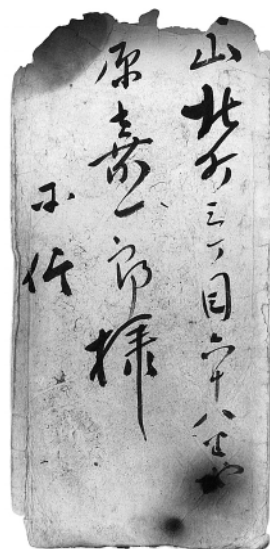
四月十三日

弟滔天

塚原先生 坐下

三 芳川寛治書簡 昭和七年（一九三二）九月二日 塚原〇六二四

【封筒表】



三 【翻刻文】

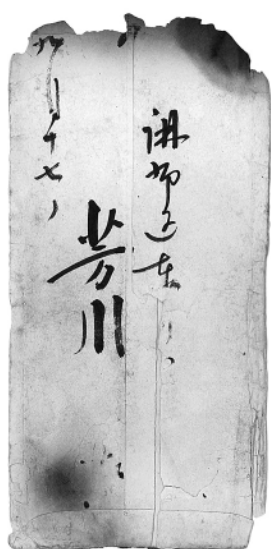
【封筒表】

〔背の〕 山北町三丁目六十八番

〔塚カ〕 原嘉一郎様

平信

【封筒裏】



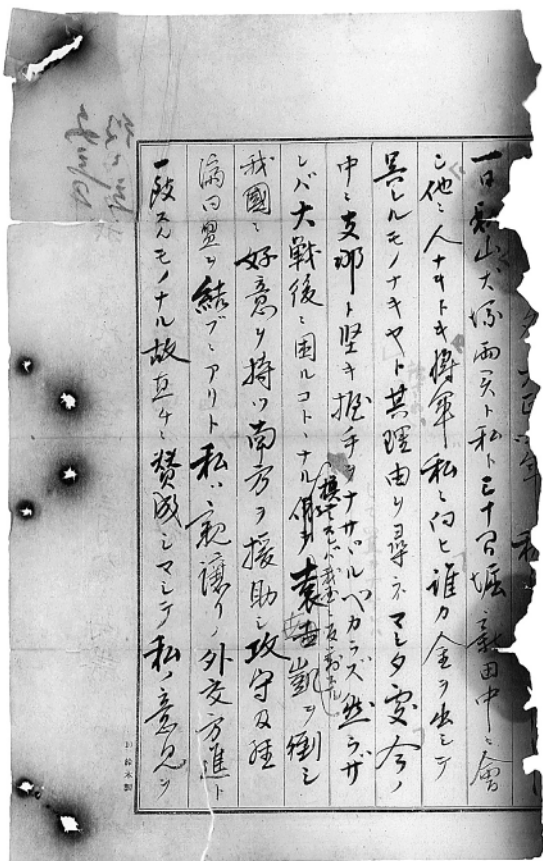
【封筒裏】

麻布区東

芳川²⁰

九月十七日

【本紙】



文章ハ訂正シテ下サイ但シ意味ヲ変ヘテハ
役ニ立タナイ

昭和七年九月記ス 伯爵芳川寛治

秋山真之將軍ノ海軍ニ対スル功績ニ就テハ

専門家ノ批評ニ譲リ私ハ私交ト申シマシヨウカ

國士トシテト申シマシヨウカ犬塚信太郎君ト三人

極メテ仲ノ好イ間柄デ能ク遊ビ(烏鷺ヲ戦ハシ)

能ク飲ミ能ク談ジマシタ偶々欧州大戦ガ勃

発シマタ時秋山將軍ハ海軍省軍務局長

私ハ三井物産株式會社時局掛參謀ヲシテ

(以上ノ三人毎日也)

(天正四年也)

私

一日秋山犬塚両君ト私ト三十間堀ノ新田中ニ會

シ他二人ナキトキ將軍私ニ向ヒ誰カ金ヲ出シテ

呉レルモノナキヤト其理由ヲ尋ネマシタ処今ノ

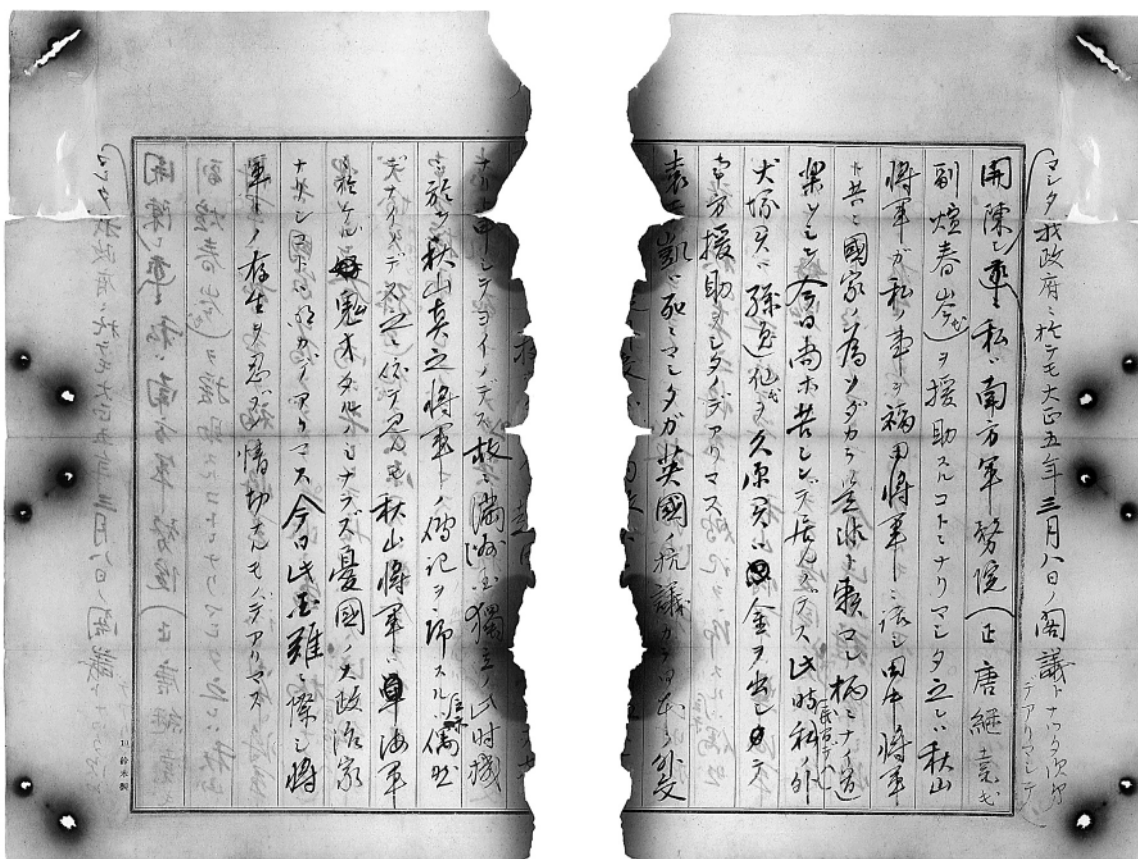
中ニ支那ト堅キ握手ヲナサザルベカラズ然ラザ

レバ大戦後ニ困ルコト、ナル依テ換言スレバ我国ニ反対スル袁世凱ヲ倒シ

我国ニ好意ヲ持ツ南方ヲ援助シ攻守及経

濟同盟ヲ結ブニアリト私ハ親讓リノ外交方進ト

一致スルモノナル故直チニ賛成シマシテ私ノ意見ヲ



開陳シマシタ我政府ニ於テモ大正五年三月八日ノ閣議トナツタ次第デア
 リマシテ遂ニ私ハ南方軍務院（正唐繼堯氏²¹）
 副煊春岑氏²²）ヲ援助スルコトニナリマシタ之レハ秋山
 將軍ガ私ノ事ヲ福田將軍ニ話シ田中將軍
 ト共ニ國家ノ為メダカラ是非ト頼マレ柄ニナイ道
 樂ヲシテ今日尚ホ苦シンデ居ルノデス此時民間デハ私ノ外
 犬塚君ハ孫逸仙氏ヲ久原君ハ²³金ヲ出シタテ
 南方援助ヲシタノデアリマス
 袁世凱ハ死ニマシタガ英國ノ抗議カラ日本ノ外交
 （従外交）
 （内政不）
 （起用カ）
 ナリト申シテヨイノデス故ニ滿洲国独立ノ此時機
 ニ於テ秋山真之將軍ノ伝記ヲ序スルハ之亦偶然
 デナイノデス之ニ依テ見ルモ秋山將軍ハ単海軍
 ニ於ける²⁴鬼才タルノミナラズ憂國ノ大政治家
 ナリシコトハ明カデアリマス今日此国難ニ際シ將
 軍ノ存生ヲ忍ブノ情切ナルモノデアリマス

四 徐謙書簡 民国七年（一九一八）十一月三日 塚原〇三三

【本紙】

軍政府司法部用箋

第 頁

塚原先生閣下昨日
午後五時半僕在
照霞樓候
光惟時有友人約在
後層室内談話不知
台駕已來及出詢時
執事已去不及晤

中華民國 年 月 日

軍政府司法部用箋

第 頁

教勳甚令日午後六
時半薄具菲酌
座設長隄南園務希
光降暢談為幸
昨已具東茲特函達
即此
台祺

徐謙

中華民國七年十一月十三日

四【翻刻文】

【本紙】

塚原先生閣下昨日
午後五時半僕在
照霞樓候
光惟時有友人約在
後層室内談話不知
台駕已來及出詢時、
執事已去不及晤
教勳甚今日午後六
時半薄具菲酌、
座設長隄南園務希
光降暢談為幸
昨已具東茲特函達。
即頌

台祺 徐謙

中華民國七年十一月十三日

【現代語訳】

塚原殿 昨日の午後五時半、照霞樓でご光臨をお待ちしておりました。ただ時に友人に誘われ、裏の部屋でお話しておりましたので、ご来駕に気がつきませんでした。部屋から出て参りお尋ねしたのですが、貴殿はすでに立ち去られた後でしたので、お会いすることができず、誠に申し訳ございませんでした。

今日の午後六時半、ささやかな酒宴を長隄の南園に設けますので、是非ご光臨の上、ご歓談できればと願っております。昨日のうちに招待状をご用意しておりましたが、（お渡しすることができなかったの）ここにお届

けいたします。

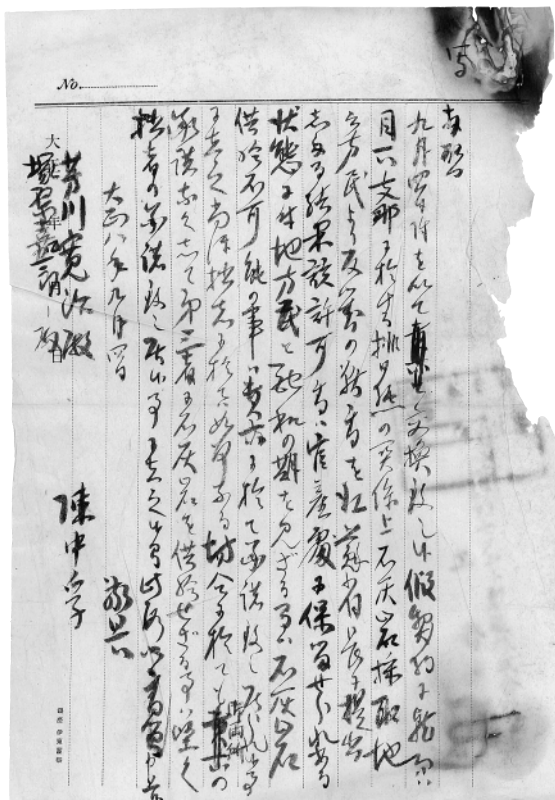
ご多幸をお祈り申し上げます。

徐謙

中華民國七年（一九一八）十一月十三日

五 陳中孚書簡 大正八年（一九一九）九月四日 塚原〇二〇九

【本紙】



五 【翻刻文】

【本紙】

写 拜啓

九月四日附を以て交換致し候仮契約に就而ハ
目下支那に於ける排日熱の關係上石灰岩採取地
々方民より反対の願書を江蘇省長に提出
したる結果許可書ハ官産処に保留せられある

状態に付地方民と融和の期を見ざる間ハ石灰岩

供給不可能の事ハ貴方に於て承諾致し居られ候事

に在之尚ほ拙者に於てハ如何なる場合に於ても御両所の

承諾なくして第三者に石灰岩を供給せざる事ハ堅く

拙者の承諾致し居候事に在之候間此段以書簡申上候

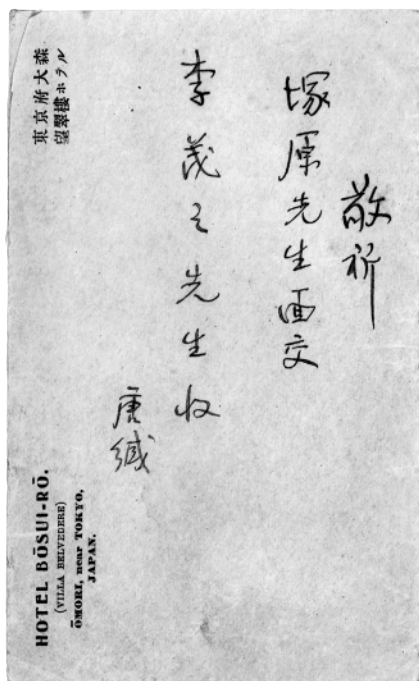
大正八年九月四日 敬具

芳川寛治 殿 陳中孚

塚原嘉一郎 殿

6-1 唐紹儀書簡 (大正七年(一九一八)一〇月二日 塚原〇五三〇)

【封筒】



6-1 【翻刻文】

【封筒】

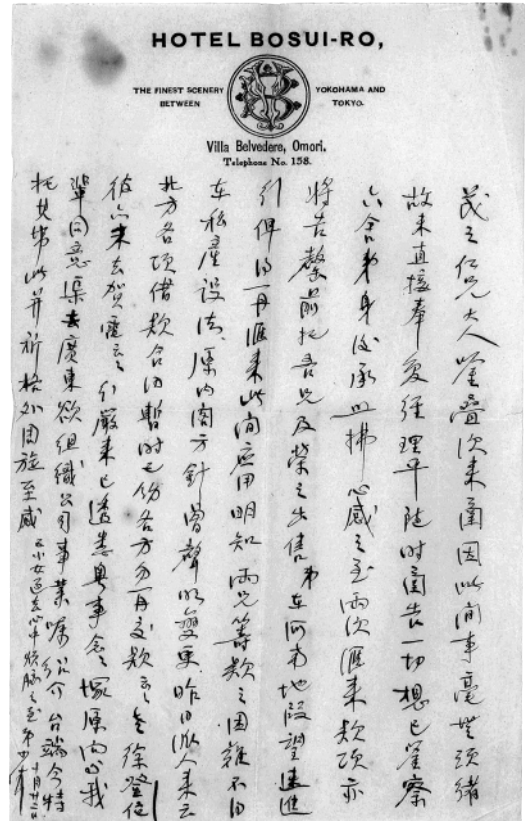
敬祈

塚原先生面交

李茂之先生収

唐緘

【本紙】



【本紙】

茂之仁兄大人鑑 豊次来函、因此間事毫無頭緒、故未直接奉復。經理平、隨時函告一切。想已鑑察下舍。弟身後承照拂、心感之至。兩次匯來款項、亦將告罄。前托吾兄及榮之出售弟在河南地段、望速進行。俾得再匯來、此間必用。明知兩兄籌款之困難、不得在私產設法。原内閣方針曾聲明變更。昨日派人來云、北方各項借款合同暫時無効、各方勿再交款云々。老徐登位、彼亦未去賀電云々。行嚴來已透悉粵事念々。塚原向与我輩同意。渠去廣東、欲組織公司事業、囑紹介台端。今特托其帶此、并祈格外周旋。至感（五小女過去心中煩腦之至）

十月廿二日

弟少川

【訳文】

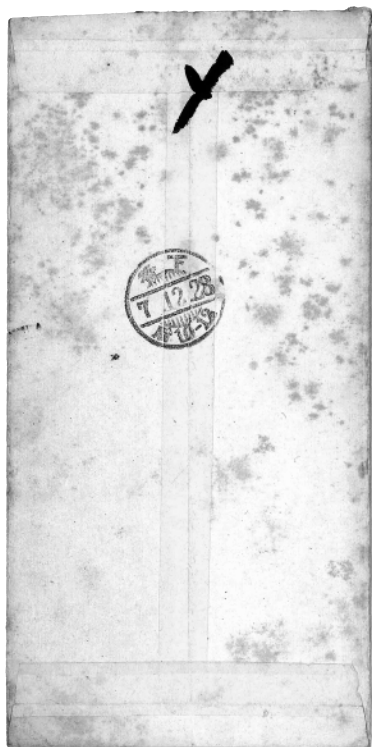
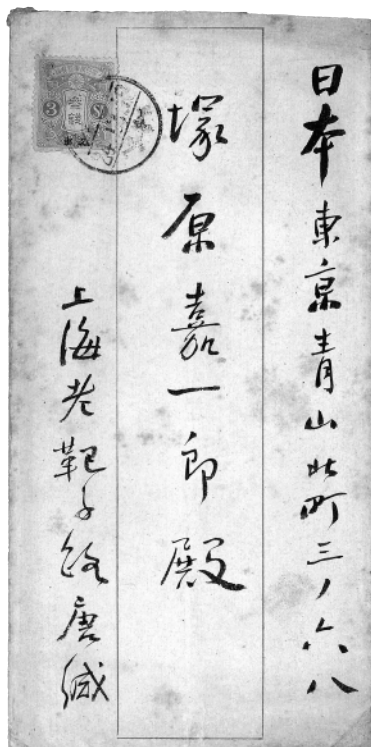
茂之兄、ご覧下さい。何度もお手紙を頂戴しましたが、こちらのことが全く目鼻がつかないため、未だ直接返信せざるにおります。落ち着き次第、手紙で全てを報告致します。すでに我が家のことによく目を配って下さっていることと存じます。私の家族の面倒をみていただき、心から感謝致しております。二度にわたって送っていただいたお金はもうすぐなくなつてしまします。以前、貴兄と榮之に頼んだ、私の河南の土地売却については、早急に進めて、送金して下さい。こちらで使います。両兄の資金工面の大変さを知つていながら、私産のために神経を使うわけにはいきません。原内閣が、方針を変更した声明を出しています。昨日、人を遣わして次のようなことを告げました。北方の各種の借金契約はしばらく無効であるため、各界ではこれからお金の払い渡しをしないということ。また、徐氏が（中華民国大總統に）就任したことに、原内閣は祝賀の電報を送っていない云々でした。なお、行嚴（章士釗の字）が来て、すでに広東のことをすべて知らせてくれたことなどです。塚原氏は以前から我々と同じ考えです。彼は広東へ行って会社事業を興そうとし、貴下を紹介して欲しいとのことですので、今彼にこの手紙を託し、彼のために格別にお世話下さるよう、お願い申し上げます。そして感謝致します。（五人の娘はかつて悩みの種でした）

十月廿二日

弟 少川

62 唐紹儀書簡 民国七年（一九一八）二月二十四日 塚原〇三三九

【封筒】



62 【翻刻文】

【封筒】

（表面）日本東京青山北町三ノ六八

塚原嘉一郎 殿

上海老靶子路 唐緘

（消印）□◇24.12.18◇□

（裏面消印）下□◇7.12.28◇后10-12

【本紙】

敬啓者日前鄙人親先
貴國諸水
照拂感荷殊深回國以來已匝一月每念
優禮之有加益仰
親鄰之懿德勉首東望昌任欽進敬作
鼎祉翔華
履端介弟喜
鴻鈞之乍轉藉鯉訊之遙馳肅賀

歲暮并申謝悃統希
呈照不宣
塚原嘉一郎 殿
唐紹儀謹啓
三月廿四日
社六華堂實記製版

【本紙】

敬啓者。日前、鄙人観光

貴国、諸承

照拂感荷殊深。回国以来、已匝一月。毎念

優礼之有加、益佩

親鄰之懿德翹首東望、曷任欽遲。敬維

鼎祉翔華、

履端介莢、喜

鴻鈞之乍転、藉鯉訊之遙馳、肅賀

歲釐、并申謝悃。統希

荃照不宣。

唐紹儀謹啓 十二月廿四日

塚原嘉一郎 殿

【本紙訳文】

謹んで申し上げます。先日、貴国を観光した際、色々とご高配頂き深く感謝致します。帰国してから、もう丸一ヶ月になりますが、賜った厚いご交誼を思うたび、隣国の友人の優れた徳に敬服し、首を長くして東を望み（日本を懐かしく思い）敬仰に絶えません。そして、ご清栄の段、元旦のご多幸をお迎えのことと存じます。また、気候が暖かくなり始めたこと（春が訪れたこと）を喜び、遙か遠くからお手紙を差し上げ、謹んでご多福をお祈りし感謝申し上げます。詳細を一つずつ書き記せないことをお許し下さい。

唐紹儀 謹啓 十二月廿四日

塚原嘉一郎 殿

7-1 殷汝耕書簡（年不明）二月八日 函塚原〇五三七 【本紙】



7-1 【翻刻文】

【本紙】

塚原仁兄惠覽

二月八日 殷汝耕頓首

拜啓

益々御清穆の段奉大賀候出発の際御

多忙の処態々御見送被下難く御礼申上候

其後去る卅日御陰にて無事着滬早速

御手紙を差出可致候処友人に依頼せし家

屋が行違を生じ彼や此と色々取込遂

延引致乍不本意失礼致候一時適當な

家屋なく当分表記の旅館に宿屋住致ことと

相成候何卒今後御手紙は同所宛御送被下度候

芳川氏の手紙は早速岑先生に面呈致候

岑氏の考は芳川氏より至急使者を御派

遣被下上海經由岑氏の紹介状を持って北

京へ交渉するを希望仕候何卒芳川氏へ右

の旨を宜しく御伝へ被下度候山田君何時

出発さるゝや宜しく御伝へ被下度候余は

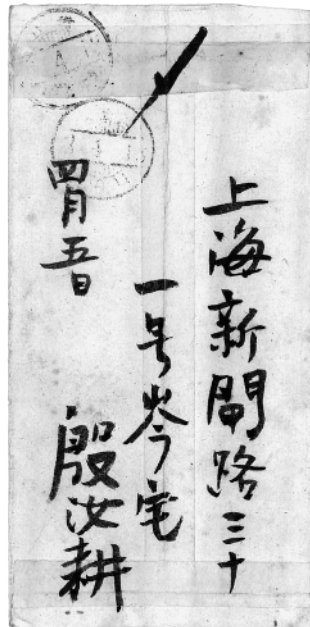
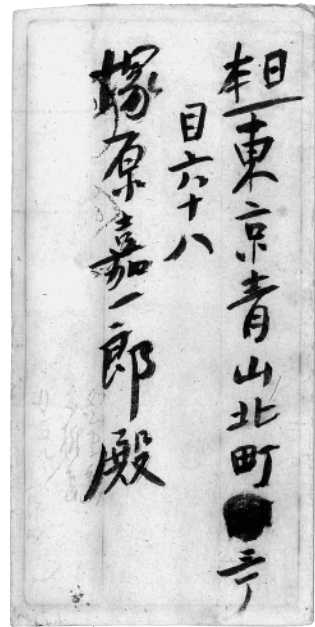
別便に譲る乍末筆御奥様へ宜しく御

伝声被下度候

家内よりも宜しく

7-2 殷汝耕書簡（年不明）四月五日 函塚原〇五三六

【封筒】



7-2 【翻刻文】

【封筒】

（表面） 日本 東京青山北町三丁目六十八

目六十八

塚原嘉二郎殿

（消印） （判読不能）

（裏面） 上海新聞路三十

一号岑宅

四月五日 殷汝耕

（裏面消印） 青山 / □.4.1□ / □

【本紙】

持紙

そのほか友由年向伏珍序の追口有
長の前は物成り物家持由の同機嫌
婦人由角先物遊り也由角いふよか上
海利着は向もよく唐系へ赴く物生に
以て之種を作用か出来遂に今日迄
延期は本日申向必す考ふ考は
海南島の南端は唐系を考程系氏

に任一彭氏は海南農林礦務局長に任
命珍の今は望本の懸に閑一色を由
世話を願うは務ん由序の比外最傑の友
人の閑仙せり信良まゝ石炭礦有之
礦質は共煙炭を礦区の面積は約日
本の百五十英坪地位は安海者蓋働
階迄交通を極便利に由座の比礦山
は投資の少相談珍友目下種を計

由中一大概の計画出する頃唐系
電信にて持師の派遣を頼む度
有るは由部会知れり也由之手
唐の比等の件は付は固く一本道
主義を守り由考方の外に柏誠
務るは其の代り事の成る迄唐系
の方も秘密に由守り下唐系
を唐系へ行はばも友人何亞農氏

代り一切の交渉も引受可仕
何年一考の空指を技師も由置
さる用考も考水唐系に返る
は岩極光少と何亞農三人先
由返るは下度か餘は役便り流り
先は用るは由
四角音 殷田耕
一九三九年九月

【本紙】

拜啓

其の後大変御無沙汰致し居候追々々

花の節に相成り御家族御一同機嫌

好く御消光被遊候や御伺ひ申上候小生上

海到着後間もなく廣東へ赴く預定に

候へしも種々作用か出来遂に今日迄

延期仕候本月中旬頃必ず参る考に候

海南島の開發は廣東より彭程萬氏⁽³¹⁾

に委任し彭氏は海南拓植農林鉞務局長に任

命致候今後資本の点に關し色々御

世話を御願申す積に御座候此外最僕の友

人の關係せる優良なる石炭鉞有之

鉞質は無煙炭にて鉞区の面積は約日

本の百五十万坪地位は安徽省蕪湖

附近交通至極便利に御座候此鉞山

は■投資の御相談致し度目下種々計

画中大体の計画出来る頃貴君へ

電信して技師の派遣を願ひ度

存し候御都合如何に候や御一示被下

度候此等の件に付ては固く一本道

主義を守り貴方の外に相談不致

積にて候其の代り事の成る迄貴君

の方も秘密を御守被下度願上候

小生廣東へ行く後も友人何亞農氏⁽³²⁾

代りに一切の交渉を引受可仕候

何卒小生の電報にて技師を派遣

さるる用意をなされ度願上候返事

は岑様宅小生と何亞農二人宛

御返事被下度候余は後便に譲り

先は用事迄勿々謹言

四月五日 殷汝耕

塚原仁兄

八 殷柱公書簡（年不明）九月二日 図塚原〇五三八

【本紙】

塚原我元大鑒別將及月正以為念中於八月六
 五日抵粵初到事忙政疏
 幾候歎甚々因崎澤田諸君均已晤面甚
 為親切此間情形日有起色在閩浙軍已
 有一部未歸餘亦可望設法兼附也瓊島
 方面已派水陸各軍兼程並進餘党勦滅
 指日可期湘南北軍師長吳佩孚刻通電
 主和長江三省約亦回此主張亦大局轉機

三會也軍府組織日漸就緒統一機関既具進
 行自易為力章君行嚴不日東行有所接洽
 乞先為政意一切以便斗時易於着手弟南洋
 之行約在三數星期之後必承
 賜示即乞寄廣州沙面海軍大尉管沿
 恕人兄收轉為荷此頌
 大安
 弟殷柱公上言
 九月十二日

八【翻刻文】

【本紙】

塚原我兄大鑑。別將及月、至以為念。弟於八月^(十カ)
 五日抵粵。初到事忙、致疏
 箋候。歉甚々々。岡崎澤田諸君、均已晤面、甚
 為親切。此間情形、日有起色。在閩浙軍、已^(三三)
 有一部來歸。余亦可望設法來附也。瓊島^(三五)
 方面、已派水陸各軍、兼程並進。余克勦滅、
 指日可期。湘南北軍師長吳佩孚、刻通電^(三六)
 主和。長江三督、約亦回此主張、亦大局轉機^(三七)
 之會也。軍府組織、日漸就緒。統一機関、既具進
 行。自易為力。章君行嚴、不日東行、有所接洽。
 乞先為致意、一切以便。到時易於着手。弟南洋
 之行、約在三數星期之後。如承

賜示、即乞寄廣州沙面海軍大尉管沿^(三九)
 恕人兄、收轉為荷。此頌^(四〇)
 大安

弟殷柱公上言

九月十二日

【訳文】

塚原兄、ご覧下さい。お別れしてからもうすぐ一月になるうとしてお
 り、大変懐かしく思い起こされます。私は八月□(破れ、十カ)五日に広
 東に着きました。来たばかりで色々忙しく、挨拶が送れてしまい、お詫
 び申し上げます。岡崎氏や澤田氏の諸君とすでにお会いしました。皆とて
 も親切でした。

こちらは日々状況が進展し、福建と浙江の軍隊は既に一部が帰順しまし
 た。残りの軍隊についても、なんとか味方になってもらうことが望めま
 す。海南島では既に水陸の各軍がまっしぐらに前進しております。残党の
 殲滅はもうすぐです。湘南北軍の師团长吳佩孚は電報を打って(南北)和
 平を主張しており、長江三督もおそらくこの主張に呼応するでしょう。
 従って、これもまた大局の転機となるはずで、軍事政権組織は徐々に
 整ってきており、統一機関も既に備わっております。従ってことを進める
 のは当然容易になるはずで、

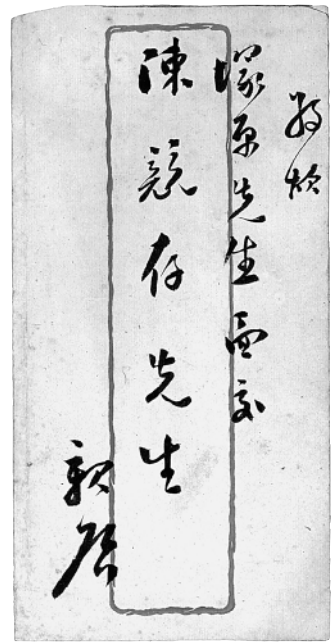
章君行嚴(章士釗)が数日後、交渉のために日本へ出向きます。先に関
 係者らに声をかけ、便宜を図って下さい。そうすれば、章も日本へ着いて
 から交渉に取り掛かり易くなるはずで、私が南洋へ行くのはおそらく数
 週間後になるでしょう。もしお手紙を頂けるのであれば、廣州沙面海軍大
 尉管沿恕人兄宛に送って下さい。

ご安泰をお祈り申し上げます。

弟 殷柱公 上言

九月十二日

九 戴傳賢書簡（年不明）一〇月二七日 塚原〇三三八
【封筒】



九【翻刻文】

【封筒】

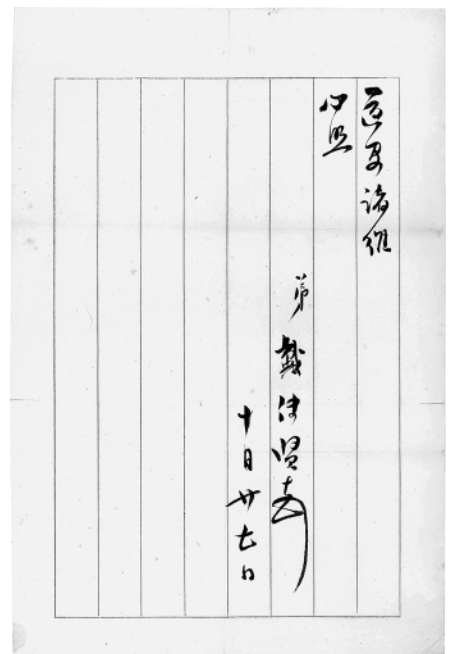
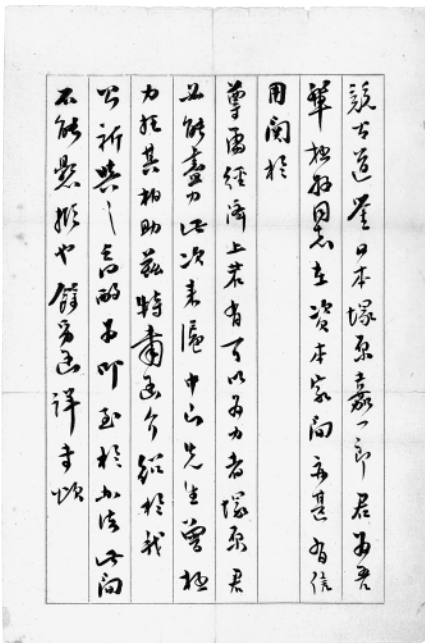
特故

塚原先生面交

陳競存⁽⁴⁾ 先生

親展

【本紙】



【本紙】

競公道鑑。日本塚原嘉一郎君、為吾

輩極拜同志。在資本家間、亦甚有信

用。關於

尊處經濟上、若有可以為力者、塚原君

必能尽力。此次來滬中山先生⁽⁴⁾ 曾極

力托其相助。茲特肅函、介紹於我

公祈與之畜酌為叩。至於弁法此間

不能懸〔推〕也。余另函詳。專頌

憂間、諸維

必照。

弟戴傳賢頓

十日廿七日

【訳文】

競公ご覧下さい。日本の塚原嘉一郎氏は我輩が極めて尊敬する同志です。資本家たちの間でも大変信用があります。貴所の経済のことで、もしお力になることがあれば、塚原氏は必ず全力を尽くして下さるはずで、今回上海に來られたので、孫文先生は懸命に彼にお力添えを頼まれました。ここに謹んで、お手紙を差し上げて（塚原氏を）我が公に紹介致します。どうか彼を引き止めて、盛大にもてなして下さいますようお願い致します。方法については、こちらでは見当が付きません。他のことは別便の手紙に詳しく記します。

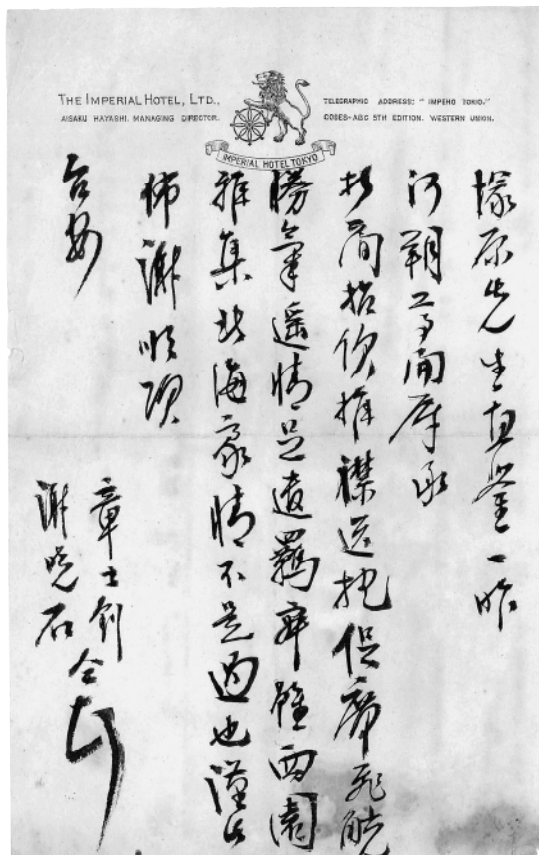
ご平安をお祈りし、ご賢察のほど、お願い申し上げます。

弟戴傳賢より

十月廿七日

一〇 章士釗・謝曉石書簡（年月日不明）

【本紙】



一〇 【翻刻文】

【本紙】

塚原先生直鑑一昨

河朔尊開辱承

折簡招飲推襟送抱促席飛觥

勝氣遙情足遣羈寂雖西園

雅集北海豪情不是過也謹此

佈謝順頌

台安

章士釗

謝曉石 全頓

【訳文】

塚原先生ご覧下さい。先日は納涼会を開催され、忝くも招待状を持ってお招き下さり、ありがとうございました。(納涼会においては)お互いに真心を持って接し、座席を近くして杯を交わし、盛んな勢いと高遠な思いは、旅の寂しさを慰めるのに十分でした。(かの有名な)西園雅集や、北海の豪情に比べても遜色がありません。謹んで感謝申し上げ、あわせてご平安をお祈り致します。

章士釗

謝暁石 より

- (1) 藤村義朗(一八七〇〜一九三三、実業家、政治家、男爵)カ。熊本藩士藤村紫朗の長男。一八九四年(明治二七)三井鉱山に入社、一八九八年三井物産に転じ、その後、上海支店長、三井物産取締役、貴院議員、大正日日新聞社長などを歴任した。『コンサイス日本人名事典 第五版』(二〇一〇・一一四五)。
- (2) 芳川寛治(一八八二・五・二〜一九五六・九・二九、実業家)。「日支組合理約」に名前あり(図塚原〇三五〇)。
- (3) 何天炯カ。
- (4) 十万問題。「国民党及び南支石炭資源に関する資料(一)」(二〇一二・一一二〜一一五)、一一三「何天炯」書簡(年不明 七月二七日)中に見える石炭を掘り出すための「十万円以上之機械」、同じく一四何天炯書簡(年不明 一〇月一八日)中「小生、要求スル参拾万円ハ、何卒同約通りニ可成候様、願上候。然ル後、石炭問題ハ、別ニ案ヲ提出可致候間。塚原氏ニ御相談御進行之程願上候」を指すか。
- (5) 盛岡市にあった劇場。羽田波之紹『原敬演説速記』に「明治三十五年六月十日盛岡藤沢座に開きたる政談演説会に於て憲政の本領と題したる演説」と見える。一明治三五年、国立国会図書館蔵。請求記号九二二二三二・一。
- (6) 大正八年(一九一九)四八歳の項に「一〇月二四日 宇都宮鹿沼を経て仙臺に滞在」「十一月八日 函館に滞在」「十一月五日 札幌より帰京」とある。一宮崎滔天(一九七三・五卷 七一六)。

(7) 腎臓のことを擬人化して呼んだものか。大正七年(一九一八)滔天は腎臓病と診断された。『宮崎滔天全集』年表(一九七三・五卷 七二四)。

(8) 「序(ついで)」の誤りか。

(9) 『孫文学説』は民國八年(一九一九)六月、上海の華強印書局において刊行された孫文の著書。この項、国立国会図書館蔵書検索システムによって調査。

(10) 前出の藤村義朗カ。

(11) 菊池良一で後出の子純。

(12) 巖君は他人の父の敬称。『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇一・五卷 一三三)。

(13) 山田純三郎で後出の子龍。

(14) 萱堂は母または他人の母の尊称。『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇一・五卷 九八)。

(15) 山田純三郎(一八七六年五月一八日〜一九六〇年二月一八日)。字は子純孫文の協力者。カ。中村義ほか編『近代日中関係史人名辞典』(二〇一〇・五九二)。

(16) 書中に「山田萱堂」とともに「菊池巖君」が見えることから菊池良一(一八七九年一〇月一日〜一九四五年二月二五日。山田純三郎の従兄弟孫文の協力者)カ。中村義ほか編『近代日中関係史人名辞典』(二〇一〇・二一六)。

(17) 「拝見を期し居り候」カ。滔天の書簡で文末の文体を精査した結果、「委細」で始まるものほとんどは「委細は後便に譲る」の文型であった。一宮崎滔天(一九七三・五卷 三二七〜四五八)。但し、本資料は面談の申し入れをしたものであるため「後便に譲る」の意は適当ではない。

(18) この書簡は年号を欠くため年代の特定は慎重を期す必要があるものの、『宮崎滔天全集 五』年表大正九年(一九二〇)四九歳の項に「四月一〇日 市中散策萱野長知(陶々亭)を往復」とあることから、大正九年と推定した。

(19) 大正九年(一九二〇)三月一日。株式・期米・綿糸・生糸各市場未曾有の崩落(戦後恐慌の始まり)。一『年表 日本歴史』筑摩書房(一九九三・六卷 一二六)より抜粋。

(20) 昭和三年七月刊行の人事興信所『人事興信録』(一九二七・ヨ七三)に芳川寛治の住所は東京市外中野町一五〇二と記載。同九年九月発刊の人事興信所『人事興信録』(一九三四・ヨ七六)に住所は東京市世田谷区玉川瀬田町三六七と記載。差出人住所が麻布となっているが転居或いは別の場所で書かれたものか。

(21) 唐継堯(一八八二〜一九二七)は軍人・政治家。字は冀廣。雲南省会沢出身。一

九一七年孫文の広東軍政府に参加。大雲南主義を唱えて、西南軍閥の雄となる。―日外アソシエーツ(一九九三・四九五)。

- (22) 岑春煊(しん しゅんけん。一八六一―一九三三)は中国の政治家。字は雲階。江西省の人。清末に巡撫・総督・郵伝部尚書等を歴任。一九一一四川省総督に赴任の途中、武昌蜂起にあい、上海にひきかえす。民国以後は、国民党の名譽総理、福建宣撫使、粵漢鐵路督弁等になったが、第二革命でシンガポールに亡命。袁世凱の帝政運動に、南方で軍務院を組織して反対。一八年には孫文下の広東軍政府を改組、自ら主席総裁に就任したが、二〇年陳炯明に追われた。―『コンサイス外国人名事典』(一九九九・四七八―四八八)。

- (23) 久原房之助カ
(24) 「照霞楼」は、清・光緒年間に中国駐アメリカ・サンフランシスコ総領事を務めた許炳榛が、故郷の広州に造った別荘の名である。後に孫文によって召集された非常国会の国民党左派の議員たちがここを借りて拠点とし、よくここに集まって政治のことを議論したので、彼らのことを「照霞楼派」と称した。

- (25) 「長堤」は長堤大馬路。広州の珠江北岸に位置し、当時最も栄えた繁華街の名前。数多くの商業施設がここに開業していた。

- (26) 「南園」は長堤大馬路に開業していた酒家の名前。当時、大三元・西園・文園と並んで「廣州四大酒家」と称された。

- (27) 河南は広東省広州市の南対岸。―外務省情報部編(一九八五・七二)。
(28) 原内閣は、立憲政友会総裁・衆議院議員の原敬を首相とする大正時代の政党内閣。一九一八年九月二九日から一九二一年一月一三日まで続いた。―国史大辞典編集委員会編(一九九〇・七〇七)。

- (29) 西原借款は第一次世界大戦中に、寺内内閣が中国の段祺瑞内閣と調印した八口一億五〇〇万円の借款。―国史大辞典編集委員会編(一九八九・八六九)。

- (30) 徐世昌(一八五五―一九三九)は北洋軍閥の文人政客、中華民国の第四代大統領。―国史大辞典編集委員会編(一九八六・七〇九)。

- (31) 彭程萬(一八七七?)、字は凌霄、江西省貴溪の人。日本測量学校を卒業。辛亥革命の時、江西省が独立した後、江西省都督に任命されたが、まもなく辞任し、都督府顧問を担当した。中華民国成立後、広東に赴き、李烈鈞のもとで贛軍の総司令官を務めた。一九一七年には広東中華民国軍政府から江西省政府委員と建設庁長に任ぜられたが、まもなく辞任した。―徐友春(一九九一)。

- (32) 何亞農(一八八〇―一九四六)は何澄の字。日本に留学し、初め振武学校に入学する。一九〇二年陸軍士官学校に入校。一九〇六年九月中国同盟会に参加し、「鐵血丈夫團」となる。一九〇七年帰国、保定陸軍速成学堂の教員に任ぜられる。一九一一年、武昌起義の際、上海で蜂起に呼応し、滬都督陳其美部第二十三師參謀長に任ぜられる。―徐友春(二〇〇七・六〇)。「何澄」の項参考。

- (33) 閩は建省の簡稱。―外務省情報部編(一九八五・六二七)。

- (34) 浙は浙江省の簡稱。―外務省情報部編(一九八五・六二七)。
(35) 瓊は海南省の別称。海南島(広東省西南部雷州半島の南)を指す。―北京・商務印書館、小学館共同編集(一九九二・一一五四)、外務省情報部編(一九八五・六一)。

- (36) 吳佩孚(一八七二―一九三九)は山東省蓬萊県出身の北洋直隸系軍閥首領。字は子玉。―国史大辞典編集委員会編(一九八五・九五五)。

- (37) 長江は、揚子江あるいは、広東省北端仁化県の東北方、湘南・江西省境を指す。―外務省情報部編(一九八五・一一、三六)。

- (38) 袁世凱の死後、江蘇督軍の馮国璋、江西督軍の李純、湖北督軍の王占元は聯盟を結んだ。これを「長江三督」と称する。後に馮国璋が代理総統に就任したことにより、李純が江蘇督軍に転任し、陳光遠が江西督軍に就任した。李・陳・王を合わせて引き続き「長江三督」と称した。ここでは後者を指す。

- (39) 広州は広東省中央部珠江北岸、広東(番禺県)の別名。―外務省情報部編(一九八五・一四〇)。

- (40) 沙面は広東省広州市の南側、珠江沿岸。―外務省情報部編(一九八五・二五四)。

- (41) 陳炯明(一八七八―一九三三)の字。広東省海豊県出身の軍閥。一九二〇年孫文を擁して広東軍政府を組織、一九二二年にクーデターを起こし孫文の北伐を挫折させた。一九二五年率いていた部隊が広東革命軍に殲滅され、一九三三年香港で病死した。―丁秋潔・宋平編(二〇〇〇・六)。

- (42) 孫中山。孫文の別名。
(43) 『西園雅集』は宋の蘇軾・黄庭堅・秦觀・晁无咎の諸人の西園の集会をいう。時人、西園雅集図を書き、米芾・揚子奇に西園雅集図記がある。

- (44) 北海樽のこと。賓客を饗応する為の酒樽。後漢の北海の相なる孔融が、常に賓客を好み、客と宴飲して樽中酒不空といった故事に基づく。